



**Data** 2022-21

監督・脚本：ユヴァル・アドラー  
製作総指揮：ノオミ・ラパス  
出演：ノオミ・ラパス／ジョエル・キナマン／クリス・メッシーナ／エイミー・サイメッツ／ジャクソン・ディーン・ヴィンセント

## 👁️👁️ みどころ

ホロコースト映画は数多いが、1950年代の“古き良きアメリカ”を舞台にしたそれは本作がはじめて。

ロマ族のマヤはナチス・ドイツの迫害を逃れ、今は米国人男性と幸せな結婚生活を送っていたが、ある日、ある男の指笛を聞くと・・・？

妹たちを殺し、私を暴行した“あのナチス野郎”が、なぜ米国人の妻とすぐ近くに？この女の悪夢は“妄想”？それとも“現実”？本作に見る監禁、暴行、自白強要、利益誘導はすべて憲法違反だが、補強証拠は？自白は？

ノオミ・ラパスが「これこそ私が探していた映画！」と惚れ込み主演した本作は、あっと驚く結末を含めて、こりゃ必見！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■ 1950年代の米国を舞台に「ホロコーストもの」が誕生 ■

1950年代のアメリカは第二次世界大戦の戦勝国として圧倒的な繁栄を誇り“古き良きアメリカ”と言われていた。ジュリアン・ムーアがそんな時代の理想的な良妻賢母役として主演した『エデンより彼方に』（03年）は、そんな時代でもアメリカには“黒人差別”という大問題があることを描いた素晴らしい映画だった（『シネマ3』165頁）。

1950年代の“古き良きアメリカ”の上流家庭は、みな郊外の戸建て庭付き住宅に住み、車を持っていた。そして、夫はスーツ姿で仕事に出かけ、妻は胸と腰を強調した大きなフレアスカートを履いていた。『エデンより彼方に』ではそんな時代のヒロインの姿が印象的だったが、それは本作でも同じだ。医師である夫ルイス（クリス・メッシーナ）の手伝いをしながら、子育てにも励んでいる妻のマヤ（ノオミ・ラパス）の日常は幸せいっぱいようだ。ところがある日、マヤが息子のパトリック（ジャクソン・ディーン・ヴィンセント）と共に近所の芝生で過ごしていた時に耳にした耳障りな指笛の音の先に目を向け

ると、そこで見た男は？

本作でマヤ役を演じ、かつ本作を製作総指揮したのは、『ミレニアム』シリーズ（09、09、09年）（『シネマ24』182頁、『シネマ25』73頁、76頁）で世界的に有名になったスウェーデン生まれの女優ノオミ・ラパス。他方、本作の脚本を書き監督したのは、本作が3作目となるイスラエルのユヴァル・アドラーだ。アドラーの脚本を読んだラパスが「これこそ私が探していた映画！」と出演を快諾し、製作総指揮も務めたことで本作の企画が進んだらしい。

私は2020年5月に『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集—戦後75年を迎えて—』を出版しているから、“ホロコーストもの”はたくさん観ているが、1950年代の“古き良きアメリカ”を舞台にした“ホロコーストもの”の登場にビックリ！

### ■□■行動力にビックリ！男を殺害？監禁？動機は？目的は？■□■

『ミレニアム ドラゴン・タトゥーの女』（09年）で見たラパスは若かったが、その行動力にはビックリさせられた。本作はそれから10年以上経っており、ラパスも子持の主婦役だが、その眼光の鋭さは同じ。演技派女優が脚本にほれ込み、製作総指揮まで務めているのだから、戦後15年の間ずっとマヤの悪夢の中に登場していた、あの憎きナチス男を発見すれば、マヤのすごい行動力が発揮されるのは当然。

今日のマヤがいつもの奇麗なフレアスカート姿ではなく、スカーフとサングラスで変装したうえ、ズボン姿になっているのは一体なぜ？工場出口から出てきた男（ジョエル・キナマン）に話しかけたうえ、不意に男の頭をハンマーで叩き、手足を縛ってトランクの中に押し込むシークエンスを見ていると、それも、なるほどと納得！人気のない川辺に車を止めたマヤは、事前に掘っておいた穴の中に男を放り込み拳銃を向けたが、「何が望みだ」「子供がいるんだ」と弁解する男を前に、さすがに引き金を引くことはできなかったようだ。そこで、男を自宅の地下室に連れて行き、椅子に縛り付けて拘束したが、マヤの目的は？日本の「監禁シリーズ」映画では、その目的が“エッチ目的”であることは明白だったが、男に対して「私を忘れたの？」「あんたの名前は？」と質問をぶつけるマヤの目的は？

### ■□■夫の協力は？二人のスタンスの相違は顕著だが・・・■□■

『ドライブ・マイ・カー』（21年）と『偶然と想像』（21年）にみる濱口竜介監督の脚本には感心しきりだが、本作の脚本もラパスが惚れ込んだだけあって面白い。本作では最初から、マヤは両親の一方が“ロマ”だということが明らかにされている。そんなマヤがアメリカ人の医師と結婚できたのは一体なぜ？それも導入部のストーリー展開の中で明らかにされる。しかし、マヤにそれ以上のさまざまな秘密があったことを自ら夫に語るの、なぜこの男を拉致監禁したのか、そして何を白状させたいのかを夫に説明するシークエンスからなる。

ナチス・ドイツによるユダヤ人への迫害は深刻だったが、ロマに対する迫害も負けず劣らず深刻なものだった。本作で何度もフラッシュバックシーンとして登場する、ナチス・

ドイツ兵によるマヤやマヤの妹たちへの仕打ちはそりゃひどいものだ。その結果、妹たちは殺されてしまったのに、なぜマヤだけは生き延び、今はアメリカ人と結婚し幸せな家庭を築いているの？医師の力を借りたマヤは、今でこそ悪夢や不眠症を克服していたが、15年前に自分や妹たちに暴行を加えた“カール”と呼ばれていた男の顔や目が忘れられないのは当然。そのため、「あんたの口笛も、あの時の目も、今でも覚えている。」と叫ぶマヤは、いくら男が「おれはトーマス・スタインマンだ」「俺はスイス人だ」と弁解しても、「私は知っている」と主張したのは仕方ない。しかし、夫のルイスは・・・？

本作のストーリー展開をみていると、ほとんどの観客は「俺はスイス人だ」というトーマスの弁解を信じるはずだ。したがって、診察所で男のカルテを調べたルイスが次第に男の言い分を信じはじめたのは当然だが、それは同時にマヤの言い分を妄想だと決めつけることになるからマズい。自分たちが今トーマスにしている行為は刑法上明らかな誘拐罪、逮捕監禁罪だ。さらに、夜中に1度トーマスの「助けてくれ！」の声が漏れたこともあって、警察の捜査も始まっているらしい。頭からこの男はトーマスではなく、あの時“カール”と呼ばれていたナチス兵だと信じ込んでいるマヤに対し、夫のルイスは客観的かつ冷静な考え方をしようとしたのは当然だ。そんな中、マヤへの夫の協力は？しかも男は「君だけに話したい」としたうえ、「スイス人の自分とアメリカ人の妻とは重婚で違法であるため、ここから抜け出せても君たちを告発することはできない。」と釈放を求めたが、その説明はどう考えても道理にならなかった。このように、何としてもトーマスに自白を求めるマヤと、あくまで真相を解明しようとするルイスとのスタンスの相違は顕著だが・・・。

## ■□■ “自白” “強要” の是非は？ “補強証拠” は？ ■□■

戦後の日本国憲法の模範とされた(?) アメリカ合衆国憲法では、『ダブル・ジョパディー』(00年) (『シネマ1』38頁) で有名になった「二重処罰の禁止」が定められている。また、自白だけでは有罪とできず、補強証拠が必要であることや、自白の強要は違法であることが明記されている。ところが、第二次世界大戦に勝利し、日本にも明治憲法に代わる新憲法を押し付けた(?) 米国を舞台に、本作のスクリーン上で繰り上げられるのは、マヤによる、トーマスに対する“自白の強要”だ。猿轡を外して、ウイスキーを無理やり飲ませるやり方は、一種の拷問。「自分はカールだと認める！」と強要したり、「ツイゴインネル・フォッツェ(ジブシーの売女)と言え！」と強要する姿は、誰がどう見ても異様だ。これは当然違法であり、監禁罪、強要罪、さらに傷害罪に該当するはずだ。また、記憶がはっきりしないマヤは、他方で「私は逃げたのか。妹を見捨てたのか。あんたが思い出させて。そうすれば殺さない」と提案。その本気度は分からないが、これが一種の“利益誘導”による“自白の強要”であることも明らかだ。

本作中盤では、鬼気迫るそんなマヤとトーマスとの自白強要を巡る駆け引きが面白いが、ハッキリ言って、このままでは手詰まりだ。しかし、帰らない夫を心配して警察に相談したトーマスの妻レイチェル(エイミー・サイメッツ)の家を訪問し、話をする中で彼女が

つけていた指輪にユダヤのシンボルをマヤが目を見ると？マヤが男の指を切断してまで男の指輪を調べると、そこにもユダヤのシンボルが！これは立派な補強証拠になるのでは！そう考えたマヤは、帰宅した夫に勝ち誇ったようにそれを報告したが、血を流した男の様子を目にしたルイスは男の手当てをし、「いいかげんにしろ！」とマヤの頬を叩いたから、アレレ・・・これではスタンスこそ違え、共同戦線でトーマスの自白を求めていたマヤとルイスの思惑は完全に決裂！ひょっとして、ルイスは警察に駆け込むの？そしてマヤは逮捕され、トーマスは解放されるの・・・？

## ■□■真相は予想どおり？それとも・・・？あっと驚く結末は？■□■

本作は、チラシにもパンフにも、「この女の悪夢は《妄想》か？《現実》か？」と書かれており、まさにその通りのテーマで緊迫したストーリーが続いていく。他方、パンフレットにある「ノオミ・ラパス インタビュー」では、「何が起こるか予測がつかない、あらゆる要素の詰まった映画」の見出しで始まっているが、これは少し大袈裟だ。つまり、指輪でユダヤのシンボルを発見するシーンなど、部分的には“あっと驚くネタ”もあるものの、大筋は“想定範囲内”だから、「何が起こるか予測がつかない」は少し言い過ぎ。そして、大方の観客は全体の流れとして、トーマスの言い分に正当性を覚えるだろうから、やっぱり全てが「マヤの妄想！」とってしまうだろう。

しかし、いやいや、それでは映画にはならないはず。映画評論のプロとしての私はあくまでそう確信していたが、本作ラストで明かされる“真相”はさて？あなたの予想通り、それとも・・・？それはあなたの目でじっくり確認してほしいが、その直後には「何が起こるか予測がつかない」との謳い文句どおり、“あっと驚く結末”が待ち構えているので、それに注目！それをしっかり予測できれば、あなたはきっとシナリオライターの才能があるはずだ。

ノオミ・ラパスが「これこそが私が探していた映画！」と絶賛し、熱演した本作のそんな結末は、あなた自身の目でじっくりと。

2022（令和4）年3月2日記